

誰でも気がついているように、今回の大災害は地震、津波という自然の災禍と、福島原発の瓦解という文明の災禍が同時に起こるかたちで発生した。私たちは誰もが、はじめは津波という自然の力に驚愕した。そして次第に原発の瓦解という現実が重い不安とともにのしかかってきた。いまもなお、最悪の事態が起きる可能性は残っている。もっとも最良のシナリオですすんだとしても、いつこの災禍が終わるのかもわからない。そればかりかどの程度の災禍が起こったのかも明確にはならないだろう。何十年後かに発生する健康被害は、因果関係すら明確にはならないだろうからである。

そして誰もが気づくことになった。私たちの世界はつくることはできても、制御することのできない文明を生みだしていたのだということ。私たちの世界がつくりだした文明自体が、危機の原因をつくりはじめたことを。このことに対して、これからどう対応していったらよいのか。こうして私たちはあまりにも重い課題を背負っていることを自覚するしかなくなった。

簡単に答えを出せるような課題ではない。しかしできるかぎりの答えをみつけだす努力は開始しなければならない。なぜなら私たちのつくりだし文明が、すでにこの世界の危機を生みだしてしまっているのだから。

危機はシステム崩壊によって起こる現象である。たとえば明治以前の危機も、その原因が津波や地震であれ、冷害や大火であれ、そのことによって生活システムや労働システムが破壊されたとき危機は起こった。今日被災地で発生している状況も、その地域の全システムが崩壊したことから生まれた危機である。ところが現代の危機には新しい要素が加わっている。それは巨大システムの崩壊という問題である。

福島原発システムが崩壊したとき、それは電力システムの崩壊へと向かう可能性をみせた。震災翌日の東京の鉄道が電力不足から十分に動かせなかったように、もしも電力システムがほとんど崩壊してしまっていたなら、交通システムも通信システムも順次瓦解していったことだろう。計画停電が経済システムに多大な影響を与えたように、ひとつの巨大システムの崩壊が他のシステムを瓦解させ、システム崩壊の連鎖がおきる。それが現代の危機を発生させる。

明治以前であるなら、システムは人間たちの手の届くところにあった。生活や労働のシステムが崩壊しても、人間たちは自分たちの手で地域のシステムを再建していくことができた。ところが現代の巨大システムの崩壊に対しては、そのような可能性すら閉じられている。しかも今日のシステムは相互性の上に展開しているから、ひとつのシステムが崩壊するとさまざまなシステムが連鎖崩壊してしまうのである。今回の大災害に対して、政府の不手際を指摘する意見がある。もちろんそれはあつただろう。だが本当の問題はそんなところにはない。政府や行政という巨大システムも他のシステムとの相互性の上で展開しているのであって、だとするなら他のシステムにガタがきているときには、政府や行政というシステムも満足に動けるはずはないのである。問題はそういうものに依存しなければならない社会をつくっていることの方にある。

私たちは巨大システム依存型の社会をつくりだしてしまったのである。そしてそれゆえにいったんシステムの瓦解が始まると、それはシステム崩壊の連鎖へと向かい、文明の災禍というかたちで危機が発生してしまう。しかもひとつのシステムが崩壊したときには、他のシステムがこの崩壊を補うこともできない。なぜならすべてのシステムに相互性のないかたちでしか展開しえないからである。実際今回の大災害のなかでも被災者たちを守ったものはシステムではなく、助け合おう、協力し合おうという、人々のシステムから離れたところにある思いや行動だった。

ところでここ確認しておかなければいけないことは、地震や津波は自然にとっては災害ではなかったということである。自然はこのような出来事をも飲み込みながら自分たちの永遠の世界を展開させる。とすると、この社会は自然と人間の関係を基盤にして成り立っているという立場にたつなら、人間にとってのみ災害であるということはどう捉えたらよいのか。おそらくこの課題に折り合いをつけられる思想を獲得しないかぎり、自然と人間が共生する社会はあり得ないだろう。そしてこのような視点にたつなら、人間にとってだけではなく、自然にとっても災害である原発事故は許し難い暴力だということになる。

伝統的な日本の社会は、人間にとっての災害に直面したとき、その折り合いを共同体という基盤のなかでつけようとしてきた。今日でも伝統的な性格を残している村にいれば、葬儀は共同体でだすものであって遺族がだすものではないという習慣が残っている。共同体で暮らした人は共同体が見送る。そこには一人一人の人間の生は有限であるが、共同体は永遠であるという思いがあった。自然が永遠であるように、共同体も永遠なのである。この永遠の世界のなかで人は生まれ、暮らし、死んでいく。ゆえに死者送りはこの永遠の世界のなかで遂げられなければならない。だから葬儀は共同体がだす。

このかたちが災害時にも維持された。いまを生きる人間にとっては災害であっても、共同体という永遠の世界にとっては、それも衝動のひとつなのである。とすればこの衝動と折り合いがつけられればよいことになる。人々はまず共同体の手で死者たちを供養し、たとえ死んでも永遠の世界の仲間であることを死者たちに告げた。そして再び自分たちの共同体を再建していった。そこに折り合いをみいだしたのである。

それに対して近代的な個人の社会、個人が巨大なシステムに依存する社会では、災害やそれにとまなう身近なものの死は、残った者にとっては悲しみや苦しみにしかなくなる。なぜなら個人の「あきらめ」というかたちでしか、折り合いのつけようがないからである。

人間たちが巨大システムに翻弄される個人でしかない社会を、私たちはこれから終焉させていかなければならないだろう。そしてこの限界をみせた社会の対岸にあるものは、地震も津波も自然にとっては災害ではないということ、折り合いをつけながら受け入れていくことが可能な社会なのである。これからの私たちはこのような問題意識をもちながら、コミュニティや技術や経済や文化や、つまりすべての問題を検討しなおさなければならなくなった。